

委託事業実施内容報告書

令和4年度「生活者としての外国人」のための日本語教育事業 【地域日本語教育実践プログラム】

実施内容報告書

団体名： 地球っ子クラブ 2000

1. 事業の概要

事業名称	子育て・教育の多文化ハッピープログラム「母語・母文化を活かし、人との繋がり、地域での活躍に結びつく日本語教育」
日本語教育活動に関する特定のニーズの実情や課題	日本で子育て・教育をする多文化家族にとって「母語・母文化をどうするか？」は大きな問題である。私たちは、15回にわたる文化庁の委嘱事業の中で一貫して「子育て・教育」にテーマを置き、外国につながる子どもたちが、日本社会で、その多様性を活かして輝くように、親子の日本語支援と並行して、ホスト社会側に多文化共生の意識が広まるよう働きかけ、双方向の変化を生み出す日本語教育を目指してきた。また、母語・母文化も大切に作る教室活動の中から、それぞれの母語を活用した多言語活動が生まれ、「おなじって嬉しい！ちがうって楽しい！」という合言葉も生まれた。外国につながる子どもにとって、母語はアイデンティティの形成という根源的な問題であるにもかかわらず、その重要さはまだあまり認知されていない。私たちの活動の中から生まれたこの多言語活動を当事者と共に広めていくことによって、子どもが多様性を活かして成長すること、親が地域社会の中で活躍すること、そして、日本社会側にも多様性を楽しんでもらい、ともに地域社会を作っていく仲間になることに今後も期待している。 さて、カリキュラム案の中で、これまで大項目のみの扱いであった「子育て・教育」について生活 Cando を作成しようという動きがあり、私たちも作成のためのアセスメント調査に協力するチャンスをいただいた。そこで気がかりだったことは、母語・母文化について触れられていないこと、孤立を生まないための人との繋がりについて考慮されていないこと、そして、ホスト社会側に必要とされる配慮についてもあまり言及がないことである。「子育て・教育」については、今までの生活 Cando と同じ流れで追加する意識ではいけないのではないかと感じている。外国出身者を主役にした多言語活動が、カリキュラム案作成、および、ホスト社会の変容にもつながることが期待できる。こうした循環を作り出し、生活者としての外国人が「日本での豊かな子育て・教育」ができるようにすることが特定のニーズであると考えている。
事業の目的	多言語活動の内容としては、外国出身者の国の文字を使って名前を書いたりカードを作ったりする文字遊び、数字を使ったゲーム、あいさつ言葉遊び、じゃんけんや早口言葉あそび、さらにみんなが知っている絵本を活用してみんなの言葉の響きを楽しむ活動など、すべて、外国出身の人との対話から形になったものである。その多言語活動を、数年前から多言語おはなし会やワークショップとして図書館等で発信し、日本人親子に楽しんでもらっている。その中では、一方的な発信にならないよう、参加している日本人親子と対話が広がるようにプログラムしている。この活動は、外国出身

	の親にとっては、日本人に向かって発信するという高度なハードルをクリアすることで日本語の力を高めること・自己肯定感を回復すること、子どもにとっては親の活躍を見て母語・母文化を肯定的に受け止める契機になること、観客である日本人側も、外国出身者と気軽に活動する機会を得て様々な思い込みに気が付くなど、多くの望ましい効果が確認されている。 地域の日本語教育は、日本語の学習を保障すること（取組2・取組3）と、ホスト社会が外国人市民とともに暮らしていることを認識し、双方向の学びを生み出すこと（取組3・取組4）の両輪でなければならないと思っている。今回の取り組みでは、日本語学習者である当事者が多言語活動の主役になり日本社会に発信することを、今までの実績を活かして、より広めていくことをプログラム化した。そして、この活動が、外国出身者の日本語力と活躍する力を高め、また、日本社会に向けては、多様性の豊かさと楽しさを、外国出身者自身が発信し広めていくこと（取組3）につながっている。さらに、日本人側が、言語・文化の違う隣人たちと「共に生きる隣人」として接する力を養うこと（取組3・取組4）で、双方向の学びと変容を促すことを目的とする。加えて、これらの取り組みを通し、外国人が「日本での豊かな子育て・教育ができるようになる日本語教育」「子育て・教育のCando作成」に資することも目指す。
事業内容の概要 （課題をどのように解決したのか、どのような点が先進的な取組であったのか分かるように記載）	「子育て・教育」は待ったなしである。日本語を学習することはもちろん大切だが、習得には時間がかかる。したがって、以下のような学習の順序を提案した。 ①「子育て・教育」についてみんなで楽しく話し合い、仲間になる ②母語・母文化を大切にした対話型学習を行う ③母語・母文化を生かして地域で活躍する（多言語活動ワークショップ、おはなし会など） ④その体験を通して、自分に自信を持つ ⑤自ら日本語を学ぶ意欲と力が付く ⑥日本語力もアップし、「子育て・教育」に主体的に取り組むことができる ⑦学校行事や、地域の活動にも参加できるようになる これは、今まで、「子育て・教育」中の親子と共に学びあってきた中で、私たちが学び取った形である。 今回、上記の流れで外国出身者と対等に協働し「地域で活躍する場」を設けたからこそ、切り取られた文脈ではなく、自然な形で生活している日本人・外国人にも学びがあった。特に外国人親子にとっては、人と交流するための日本語や自分が表現したいことを自分の言葉で表現できる日本語の力の向上だけでなく、生活candoの中にもある行動（交通機関を利用できる、銀行の口座が開設できる）などもクリアできた。外国出身の親の活躍を見ることで、子どもたちも自分や自分のルーツに誇りを感じ、大きく成長できる足掛かりになったようである。
事業の実施期間	令和4年5月 ～ 令和5年3月（10か月間）

2. 事業の実施体制

(1) 運営委員会

実施体制	<運営委員メンバー> 公益財団法人埼玉県国際交流協会 福田智子氏 公益社団法人さいたま観光国際協会国際交流センター 石川信雄氏 東洋大学社会学部国際社会学科 村上一基氏 埼玉県教育局市町村支援部生涯学習推進課 塚崎章氏 埼玉県県民生活部国際課多文化共生担当 安西智美氏 さいたま市教育委員会学校教育指導第1課 坪井政彦氏、若谷洋二氏 さいたま市経済局商工観光部観光国際課 増子千穂氏、村田菜穂子氏 埼玉大学教育学部 福島賢二氏 地球っ子クラブ2000 高柳なな枝 地球っ子クラブ2000・あそび捨てんきりん 芳賀洋子氏 (スタッフ) 多文化子育ての会 coconico 井上くみ子氏 <開催回数と時期>全3回：6月、10月、3月に実施 <検討内容> ●文化庁委嘱事業における昨年度までの実績、今年度の事業の詳細を報告し、連携を確認した。 ●さいたま市における多文化家庭の子育て・教育の現状と課題について共有。外国にルーツをもつ彼らが、これからの日本を支える大切な人材であることを認識し、多様性をプラスに受け止める学校・社会づくりに向けて連携した。 ●外国出身者の教育に先進的な取り組みを行っている横浜市の「鶴見ひまわり」を見学し、さいたま市でどのようなものが考え得るか協議を行った。またそれにつながる活動として、東洋大学と埼玉大学でシンポジウムを行い、「初期対応」や「学び」について考える機会をもった。 ●体制整備の大きな柱である日本語教育コーディネーターの各方面への配置を呼びかけた。 ●外国ルーツの住民が自ら発信する活動を側面から支えてもらう連携・協働体制をつくった。 ●やさしい日本語の普及をともに考え、講座などで連携した。 ●事業の進捗状況・成果についての検証・評価を行った。 <各委員との連携事業> 県・国際課関係 埼玉県県民生活部国際課多文化共生担当 安西智美氏 公益財団法人埼玉県国際交流協会 福田智子氏 ・埼玉県 地域日本語教室相談・立ち上げアドバイザー ・埼玉県多文化共生推進会議 委員 ・埼玉県日本語教室支援協議会 委員
------	--

- ・第3回外国人お助けボランティア育成研修 市町村による事例発表
- ・日本語教室ボランティア講座「地域日本語教室とは」講師（川越会場、越谷会場）
- ・日本語教室高校生ボランティア体験事業

県・生涯学習課

埼玉県教育局市町村支援部生涯学習推進課 塚崎章氏

- ・「外国人親子への支援と地域住民とのつながりづくり」モデル事業推進会議委員
- ・ふじみ野市日本語指導研修会 講演及び指導講評
- ・埼玉県社会教育委員会 委員

市・国際関係

さいたま市経済局商工観光部観光国際課 増子千穂氏、村田菜穂子氏

公益社団法人さいたま観光国際協会国際交流センター 石川信雄氏

- ・さいたま市地域日本語教育体制整備事業 総合調整会議 会議参加
- ・さいたま市地域日本語ボランティア教室連携会議
- ・多文化体験ひろば（発信事業）

市・教育委員会

さいたま市教育委員会学校教育部指導第1課 坪井政彦氏、若谷洋二氏

- ・さいたま市日本語指導員研修会
- ・夏休み希望研修「日本語指導が必要な児童生徒の支援方法研修会」講師
- ・教育研究所 教師力パワーアップ講座

市・学校

さいたま市立与野南中学校 吉原誠士氏（運営委員会出席不可のため脱運営委員）

- ・青少年育成与野南地区会 子育て講座
- 「多文化共生社会に向けて—おんなじって嬉しい！ちがうって楽しい！—」
- ・学校相談訪問

大学

東洋大学社会学部国際社会学科 村上一基氏

- ・東洋大学社会学部国際社会学科新入生歓迎行事
「やさしい日本語・やさしい社会～多様性を楽しむ人へ～」講演・ワークショップ
- ・東洋大学人間科学総合研究所 公開シンポジウム
「外国にルーツを持つ子どもに対する日本語初期指導
—実践から見た現状と課題をもとに＜初期対応＞のあり方を考える—」パネリスト
- ・次世代育成（大学生のボランティア参加）

	埼玉大学教育学部 福島賢二氏 ・埼玉大学紀要 教育学部, 71(2) : 19 大 46 (2022) 「多様性に根ざした「公正」としての「教育」活動の検討（第一部）：地球っ子グループ「てんきりん」の2021年の活動に着目して」 ・2022 年度 生活授業研究会（生活授業研）記念シンポジウム パネリスト 「生活（life）」から人間の育ちと学びをとらえ直すー創る・楽しむ・共生する ・次世代育成（大学生のボランティア参加） 現状や課題を共有し、それぞれの委員と連携し、事業にあたることができた。 行政・公教育・大学・地域資源が連携・協働して、「子育て・教育」「多文化共生の街づくり」など地域の課題解決に向かうモデルとして評価できる。
--	--

(2) 地域における関係機関・団体等との連携・協力

連携体制	<連携による効果> 様々な団体、機関と連携し、話し合いの機会を持つことにより、地域の日本語教育や、外国ルーツの子どもに対する理解を広げることができた。また、学校教職員や日本語指導員と連携することで、子どもたちの教育環境の改善につながった。特に学習を希望する外国出身者を地域の教室につなげる力になった。 特に、今回は、子育て、教育をテーマにする中で、多言語おはなし会・文化交流会など、外国出身者の活躍を生み出す場づくりへ貢献することができた。これら連携した取り組みが、今後、多文化共生の街作り、外国出身者が暮らしやすい街づくりにつながっていくのではないかと期待している。 連携機関、団体を下に示す。 <運営委員会> さいたま市および埼玉県教育委員会、国際交流関係機関、現職校長、大学教員 <教室活動> スクールソーシャルワーカー、学校地域連携コーディネーター等子どもたちの現場にいる専門職、市内図書館 <人材育成事業> 運営委員会、教育委員会、さいたま市教育研究所、埼玉県国際課、訪問研修先の学校等 <外国人の活躍> 埼玉県国際交流協会、市内図書館、NPO 法人さいたまユースサポート、さいたま市チャレンジスクール、公民館、生協パルシステム、コープみらい埼玉、さいたま市子育て支援センターあいぱれっと、埼玉県げんきプラザ
------	---

	<その他・多文化共生の街作り> 埼玉県多文化共生推進委員会、埼玉県社会教育委員会、埼玉県社会福祉士会 「外国人親子への支援と地域住民とのつながりづくり」モデル事業推進会議委員会、 埼玉県 地域日本語教室相談・立ち上げアドバイザー さいたま市地域日本語教育体制整備事業 総合調整会議 <日本語教育に関わる人たちの学習> 昨年度の人材育成講座に参加した全国の日本語教育関係者、教育委員会、教育研究所
--	--

(3) 中核メンバー及び関係機関・団体による本事業の実施体制

実施体制	地球っ子グループの3つの団体（地球っ子クラブ2000、多文化子育ての会 Coconico、あそび捨てんきりん）とその代表者（中核メンバー）が中心となり、すべての事業に取り組んだ。中核メンバーは、共に活動する会員、外国出身の隣人達の良さを引き出し、それぞれが持てる力を十分発揮し、取組がより豊かになるように努力した。また、今までの文化庁委嘱事業で築いてきた他機関との連携を重視、本事業が円滑に進むよう、かつ、新たな繋がりや広がりを生み出すよう、発信にも力を入れた。 1) 運営委員会は、「子育て・教育」の日本語教育の現状と課題を共有し、取組が効果的に進むよう協力し、検証も担った。 2) 教室活動：3つの団体が、それぞれの特色を生かして、取組を担当。スタッフは、3つの団体の構成員全員が横断的に関わった。 3) 外国出身者が、日本語教室で学んだ成果を、多言語活動・多文化活動という形で発信した。これは、運営委員会はじめ、多くの連携機関の理解と協力を得て実施可能となった。 4) 人材育成については、運営委員会、および、これまでの連携機関と協力して推進していった。 5) その他、さいたま市の多文化の子どもたちに対する日本語教育事業の課題（研修がない、人材に専門性がない、相談体制がないなど）解決のために、コーディネーターの設置を含む体制整備に向けて、引き続き、運営委員会をはじめとする各機関と協働し、積極的にリードしていきたい。
------	---

3. 各取組の報告

<取組 1>運営委員会（上述）

<取組 2>

特定のニーズに応じた日本語教育の実施日本語教育の実施

【活動の名称：日本での子育て・教育を豊かにする「母語母文化・人との繋がり・地域での活躍」の視点を持った日本語教育】

取組の目標	外国出身者が、日本で「豊かな子育て・教育」ができるための日本語教育を提供する。「母語・母文化を大切にした日本語教育」「仲間づくりができる教室活動」「地域社会で活躍する力をつける日本語教育」「日本人を巻き込んで、多様性の楽しさを伝える教室活動」を柱に、自分のルーツに自信をもって主体的に子育て、教育に当たる力を養う。その力を取組 3 及び取組 4 の発信に結びつけ、成果は、取組 3 と取組 4 の発信で明らかにする。		
内容	目標を達成するために、以下の 3 つの内容を基準に、対話型の教室活動を考えた。 1) 子育て・教育について、仲間と話し合おう！ 参加者のニーズに合わせて、母子手帳等の具体的な資料を持ち寄り、話し合うことにより、日本での「子育て・教育」の実際を知ることができた。また、話し合いを通して、相談できる仲間を作ることにつながり、体験型の活動も積極的に取り入れた。 2) 母語母文化を大切にした日本語教育 「子育て・教育」の中で、家庭内言語の問題は大きい。仲間で話し合いながら、絵本等を活用し、母語母文化の価値を再確認した。自分の言葉を認められるということは、非常に大きな自己肯定感につながるということを、これまでの活動で確信している。 3) 今使える日本語で、仲間に発信しよう！ 母語・母文化を活用した多言語活動、多文化活動を身に付け、教室内で発表するなどして、取組 3 の発信につなげた。		
実施期間	令和 4 年 5 月 26 日から 令和 5 年 3 月 31 日まで	授業時間 ・コマ数	1 回 2 時間×20 回＝40 時間 3 時間×1 回＝3 時間
対象者	外国出身者、外国出身の家族、外国にルーツのある人、その人たちと関わりのある人	参加者	総数 82 人 (受講者 78 人、指導者・支援者等 10 人：うち 6 人は受講者でもある)
カリキュラム案活用	【大分類】 「V 子育て・教育を行う」…これらの内容を学ぶことを通して、仲間づくりに繋がるようデザイン、つまり対話・体験を多く取り入れた。その中で、参加者のその時のニーズに応じて、臨機応変に項目を横断できるようにした。 【中分類】		

	「15 出産に備える」「17 家庭で子供を育てる」「18 地域で子供を育てる」「19 幼稚園・保育所で教育・保育を受けさせる」「20 小・中・高等学校で教育を受けさせる」「なし 地域で活躍する」…カリキュラム案にはないが、日本語教育の最終目標とされるエンパワメント（ガイドブック）が、子育て中の母親にとって重要であると考え取り入れた。 【小分類】 「(02) ●母子健康手帳をもらう」…実際に母子手帳を持ち寄り、みんなで話し合った（対話） 「(なし) 家庭内言語について考える」…カリキュラム案に載っていないが、外国ルーツの母親にとっては大きな問題だと考え取り入れた。 「(01) ●託児施設・保育施設を利用する」…幼稚園、保育所などについて、それぞれのニーズをもとに情報交換をした。 「(02) ●公園を利用する」…実際に、施設を利用した。（体験） 「(01) ●就学に関する手続を行う」・「(02) ●学校行事に参加する」…様々な資料を基にみんなで話しあった（対話）									
使用した教材・リソース	地球っ子グループ作成会話集、母子手帳、地域の地図、幼稚園や保育園のホームページ、家族写真、学校案内パンフレットなど									
受講者の出身（ルーツ）・国別内訳（人）	中国	韓国	ブラジル	ベトナム	ネパール	タイ	インドネシア	ペルー	フィリピン	日本
	13	1	2	7	0	1	1	0	2	15
	バングラデシュ（12名）、インド（9名）、スリランカ（2名）、トルコ・クルド（1名）、香港（1名）、マレーシア（2名）、アフガニスタン（6名）、モンゴル（2名）、アルゼンチン（1名）									

（１）特徴的な活動風景（２～３ 回分）

取組事例①

【第２回 令和４年５月２８日】大宮公園大散策

大宮駅から商店街を抜け、大宮公園までの散策。お天気にも恵まれ、休憩をしながら歩く。途中、自己紹介ノートを作り、誕生日や星座などを聞き、初対面の人同士も仲良くなっていく。左右の狛犬の違いや、自然の木々など、観察と会話をしながら公園へ到着。ベンチで休憩し、小動物園へ。「小さい動物のいる園」なのか、「面積の小さい動物園」なのか会話を楽しむ。鳥園では孔雀やフラミンゴがすぐ目の前に。感動や不思議がいっぱいで、頭と日本語をフル回転。参加者の顔を見ていると、体験を通しての学びがあったと実感。多様な国の親子が集まり、いろんな言葉であいさつをし、一緒に楽しい時間を過ごすことができた。



取組事例②

【第18回 令和5年1月23日】くるくる回る紙コップでお話づくり

うさぎ年ということもあり、うさぎの絵本「わたしのワンピース（こぐま社）」を題材におはなし工作をする。ワンピースが景色に合わせて変わっていくという話から、紙コップをくるくる回してワンピースが変わる工作を見本としてみせる。それを発展させ、「私はいろいろなことばがわかるのよ。Xin chao! これはAちゃんのことば、ベトナム語」などとみんなの言葉にくるくる変わるのもいいねと発展させた工作もみせ、それぞれお話をしながらどのような工作ができるか考えていった。自分たちで考えて「くるくる変わる」を上手く利用し、それぞれが工夫する時間。親子で相談し、「自分の国のあいさついろいろ」「大アナコンダの好きな物」「魔法のランプで出してもらいたいもの」などなど、それぞれのアイデアで作品を完成させる。「息子のKくんに望むこと」を作ったママは、「健康、いつも笑顔、話をよく聞く」など、くるくる出てきて、愛情あふれる作品となった。



（2）目標の達成状況・成果（取組による特定のニーズの充足）

今回の教室活動では、「子育て・教育」をテーマに対話と体験学習を取り入れることで、日本での子育てや教育について理解を深めるだけでなく、親子の会話も増えた。それにより、自分の母語・母文化に誇りを持ち、自己肯定感と自信をつけた。また、いつでも相談できる仲間もでき、日本での生活が安心して送れるとともに、自分らしく、活躍できる場所があることは、今後の日本語を自ら獲得していく力につながっていることは間違いないと感じた。

（3）今後の改善点について

日本語のレベルや、滞在歴、年齢や興味に多様性があり、受験対策や日常生活など、求める日本語力もさまざまである。それぞれに今必要なことが「日本語」なのか「社会適応」なのか、その都度、幅広く個別対応の必要もでてきている。その上で、この多様性を生かし、どのような人でも同じ時間を一緒に楽しく過ごすことができるという基本的な考えから、みんなでの活動からの日本語だけではない学びも大切にしていきたい。

<取組 3>取組の成果の発信や普及及び住民の日本語教育への理解の促進 【名称：他機関と連携して多言語・多文化活動を広め、多様性の豊かさを啓発する事業「おんなじってうれしい！ちがうってたのしい！」】	
取組の目標	生活者としての外国人が、日本で自分の力を活かして暮らしていくためには、外国人自身が日本語習得の努力をすると共に、日本社会側も共生社会の実現を目指して変わる必要がある。しかし、外国人との交流そのものが日常的に少ない現状では、解決が難しい課題である。私たちが、教室活動を通して学習者と作り出した「母語・母文化を活用した多言語活動」は、「おんなじってうれしい！ちがうって楽しい！」を実感してもらい、多様性の豊かさを楽しむ力をつけることができるプログラムである。教室活動でこのスキルを獲得した外国出身市民が、私たち日本人と協働で、学校や地域の一般市民に発信することにより、地域に様々な気付きが生まれる。また、発信の機会を設定するために他機関との連携を積極的に進めることも、共生社会実現に役立つ。連携機関との振り返りの会や参加者のアンケートなどで、成果を検証し、日本語教育だけでなく、学校教育の中にも広く普及することをめざす。
内容	私たちがこの活動を作り上げることができたのは、教室活動の中で、たくさんの対話と活動を経て対等の関係を築くことができたからである。多言語活動をはじめとした発信をすることで、外国出身者は地域の一員として活躍し、多文化共生の街づくりに貢献することができた。具体的な取り組みは以下である。 ●多言語おはなし会とワークショップ（市内図書館と協働） ・南浦和図書館 7月27日（土）14：00～16：00 ・大宮図書館 8月20日（土）14：00～16：00 ・大宮図書館 10月23日（日）13：00～15：00 ・武蔵浦和図書館 12月4日（日）12：30～14：30 ●チベット映画「ぼくの村は天空にある」上映と交流 10月1日（土）10：30～12：30 （さいたまユースサポートネットと協働） ●つるとりボランティア10月22日（土）13：00～15：00 （NPO 法人エコエコと協働） ●キムチ作り・12月4日（日） 10：00～15：00 ●多文化体験ひろば 12月10日（土）13：00～16：00 （さいたま市子育て支援センター「あいぱれっと」と協働） ●香港のお話と折り紙ワークショップ（チャレンジスクールと協働） 美園北小学校 12月17日（土） 9：30～11：30 ●世界のお茶カフェ～クルドの仲間を囲んで～ 3月21日（火）10：00～12：00（クルドのお正月とトルコ地震・募金活動）

実施期間	令和4年6月1日から 令和5年3月31日まで	授業時間 ・コマ数	1回2時間×8回＝16時間 1回3時間＋1回5時間＝8時間							
対象者	日本語教育関係者、 学校関係者、行政関係 者、外国出身者、その 他すべての人	参加者	総数 延べ361人 (受講者 延べ318人、指導者4人・ 支援者・発表者等 延べ 39人)							
カリキュラム 案活用	0901 金融機関の口座を開設する、10 電車・バスを利用する、32 異文化を理解する。 カリキュラム案の各分類は、外国人だけでなく日本人も理解すべきものである。この取 り組みでは、異文化コミュニケーションを通じて、双方の異文化理解を深めることがで きた。									
使用した教 材・リソース	多言語活動で使用した絵本 『挨拶絵本』『おおきなかぶ』『おんなじおんなじでもちよっとちがう』 『おめでとうおひさま』『わにさんどきっはいしゃさんどきっ』『ぼくのうちはゲル』 各国の地図、地球っ子グループ作成の話題集『多文化ハッピープログラム』									
受講者の出身 (ルーツ)・ 国別内訳 (人)	中国	韓国	ブラジル	ベトナム	ネパール	タイ	インド ネシア	ペルー	フィリ ピン	日本
	0	1	2	4	0	1	2	0	0	延べ278
	モンゴル(2人)、バングラデシュ(12人)、インド(6人)、チベット(1人)、パラグアイ(1人) 香港(1人)、ミャンマー(1人)、トルコ(3人)									

(1) 特徴的な活動風景(2～3回分)

取組事例①

【第4回 令和4年10月22日】つるとりボランティア 連携：NPO 法人エコエコ、NHK すくすく子育て 「人はだれでもみんなの役に立ちたい！」8年前から、さいたま市見沼田んぼの保全ボランティアを続 けている。この数年は、桜の木に巻き付いた葛の蔓を「うんとこしょ、どっこいしょ！」『おおきな かぶ』さながら、みんなで力を合わせて除去する作業をしている。掛け声は、参加者の様々な言語でも。 毎年、NPO 法人エコエコと連携し、自然保護についても学んでいる。つるとり終了後は、取った蔓も無 駄にしないようにリース作りに活用、ステキな作品が出来上がった。さらに特記すべきことは、今回 は、NHK[すくすく子育て]の取材が入り、撮影とインタビューが行われたことである。取材された内容 は12月の番組で放映された。インタビューを受けた外国出身者は、貴重な体験を通して大きな自信に つながった。一方、NHK取材班の質問事項が「子育てで困っていること」に偏っていることについて は、事前の打ち合わせで修正を求めた。(参加者46人)



取組事例②

【第8回 令和4年12月10日】「多文化体験ひろば」

連携：さいたま市子育て支援センターあいぱれっと、さいたま市国際交流センター

みんなの魅力があふれた、とてもカラフルな会になった。交流の過程で、相手が言っていることを聞き、自分が伝えたいことを表現する。「日本語教室」という形でなくても、日本語で交流することが何よりもことばの習得につながる。連携のおかげで、多くの地域の方たちにも参加してもらえた。かしこまった講座や勉強だけではなく、このような機会を通して多様性を感じ、多様性の楽しさ、それぞれのすてきなところを発見できた。「おんなじって嬉しい！ちがうって楽しい！」という、多文化共生につながる私たちの合い言葉を、発信者、参加者双方が実感することができたと思う。

・今日は、自分の国の遊びを紹介したり、息子も一緒に頑張って、しあわせでした。ありがとうございました。（インドネシア出身）

・このような活動を学校現場で生かしてほしい。そのために、学校関係者に来てほしかった。私たちの力では学校関係者に声をかけることは難しいので、そのあたりに行政の力をお借りしたい。（主催者）

（一般参加者 122 人 運営側スタッフ・親子）



（２）目標の達成状況・成果（取組による特定のニーズの充足）

日常、共に暮らす外国出身者と対等の関係の中で対話をするという機会は限られている。この取り組みの一般参加者は、いろいろな国の言語や文化を楽しみながら、外国人市民との日本語でのコミュニケーションを体験した。その中で、様々な国の人たちが共に暮らしていること、世界にはいろんな言葉があって、それぞれの言葉と文化を大切にしながら暮らしているということ、彼らがとても魅力的な存在であること等に気づいたと思う。一方、外国出身者は、日本人の参加者への発信という舞台を得て輝き、それが、子育てにも、日本語習得にも大きな力になった。中には、この経験を経て、「初めて一人で電車に乗りました」と嬉しそうに報告してくれたり、自分で銀行口座を開設したりという can do につながった人もいる。「日本語ができるようになったら〇〇したい」ではなく、今の日本語で活躍することで、本来の自分を取り戻す力になったと考える。この企画が、外国出身者と日本人双方の学びとなり、多文化共生社会への一歩を作ることができたと考えている。

なお、外国出身者が、日本語の壁を越えて地域で活躍すること、特に母語母文化をその人の特技として発信することの成果を検証し、「子育て・教育」の Can do に資する提案につながることを願っている。

（３）今後の改善点について

多くの団体と協働でできた取り組みだったことは、大きな成果だった。一方で、協働する団体と、事業の目的や理念が今一つ共有できていないと感ずることもあった。そのために、事前に打ち合わせの会議を申し出て話し合うなどして共通理解に至る場合もあったが、最後の反省会で、そのずれに気づくこともあった。特に、私たちは、これらの協働事業を多文化共生の街づくりへの啓蒙活動の一環と位置付けているが、その意識が行政側の担当者になかった場合があげられる。今後は、他団体と協働の事業を進める際、事業の具体的な内容だけでなく、その目的や理念などを共有できているものと思い込まずに、丁寧に話し合うことの必要性を感じた。

任意の取組＜取組４＞日本語教育における多文化共生の視点を広める人材育成事業 【名称：日本人も変わろう！外国出身者の「子育て・教育」における日本人側に求められる学びと変容について考える講座】	
取組の目標	生活者としての外国人のための生活 Can do「子育て・教育」を考える時、外国出身者のみが頑張るのではなく、日本社会側も外国出身者に優しい社会を作らなければならない。ここでは、日本人側に求められるべき学びと Can do をテーマに、当事者との対話や多言語・多文化活動など、外国出身者からの発信を取り入れた講座とする。やさしい日本語講座、多文化共生の人づくり講座などを通し、私たちが、これまで外国出身者と共に学び、対話し、受け取って来たメッセージを参加者と共有し、日本人社会も変わろうというメッセージを発信する。受講者にはアンケートに協力してもらい、成果と改善点を把握し、生活 Can do 作成への提言につなげる。
内容	障害者基本法があり、障害者が暮らしやすくする社会を作らなければならない。外国人のための生活 Can do 作成にも、外国出身者の「豊かな子育て・教育」を日本社会が支える必要があるという考えのもとに、日本人側の学びと Can do を充実するための実践的講座を開催した。いずれも、当事者を発表者として迎え、当事者の体験談を聞き、当事者と多言語活動などのワークショップを楽しむなど、当事者に活躍してもらう実践講座とする。外国人のための生活 Cando と日本人側の共生のための Can do とをセットで考えることを提案した。 1) アン・クレシー二氏講演会 7月10日(日)9:30~12:30 「お互いに変わらないかんばい！」～外国人から見た日本～ 2) 第1回勉強会 8月19日(金)19:30~21:30 3) パワーアップ講座 10月14日(金)18:50~20:30 4) 第2回勉強会 11月25日(金)19:00~21:30 5) さいたま市立見沼小学校訪問研修 1月6日(金)15:30~17:00 6) シンポジウム(東洋大学村上准教授主催・当団体と協働) 1月27日(金)13:00~17:00 「外国にルーツを持つ子どもに対する日本語初期指導～実践から見た現状と課題をもとに＜初期対応＞のあり方を考える」 7) シンポジウム振り返りの勉強会 1月30日(月)、1月31日(火)、2月1日(水)19:30~21:30 8) シンポジウム(埼玉大学福島准教授主催・当団体と協働) 2月19日(日)13:00~17:00 「『生活(life)』から人間の育ちと学びをとらえ直す 一創る・楽しむ・共生する」 9) パワーアップ講座 3月3日(金)18:50~20:50

実施期間	令和4年6月1日 から 令和5年3月31日 まで		授業時間 ・コマ数	1回1.5時間×2回＝3時間 1回2時間×5回＝10時間 1回2.5時間×1回＝2.5時間 1回3時間×1回＝3時間 1回4時間×2回＝8時間						
対象者	日本語教育関係者、学校関係者、行政関係者、外国出身者、その他すべての人		参加者	総数 延べ 377人 (受講者 延べ360人、 指導者・講演者 14人 発表者・支援者等7人)						
カリキュラム案活用	人材育成なので、特に活用してはいないが、カリキュラム案のもとになる理念は大切にしている。									
使用した教材・リソース	●文化庁「生活者としての外国人」のための日本語教育事業作成教材『改訂版 今日からいっしょに』 ●それぞれの講師作成 PPT ●文部科学省『外国人児童生徒受け入れの手引き』 ●中央教育審議会『令和の日本語型学校教育の構築を目指して』									
受講者の出身 (ルーツ)・ 国別内訳 (人)	中国・台湾	韓国	ブラジル	ベトナム	ネパール	タイ	インドネシア	ペルー	フィリピン	日本
	3	0	0	0	0	0	0	0	0	延べ333
	スリランカ(1人)、アルゼンチン(1人)									

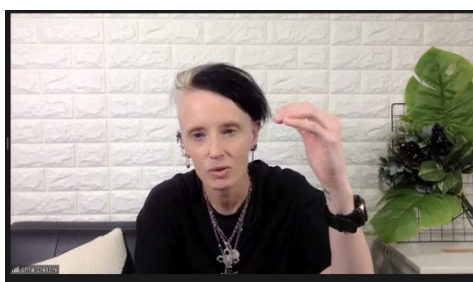
(1) 特徴的な活動風景(2～3回分)

取組事例①

【第1回 講演会 令和4年7月10日】

「お互いに変わらないかんばいっ！～外国人から見た日本。世界観を語ります～」

2022年度人材育成事業の大テーマ「日本人も変わろう！日本語教育において求められる学びと変容」の第1回目として、日本で暮らす外国人当事者でもある北九州市立大学准教授アン・クレシーニ氏をお招きした。「3時間という時間をもらってしあわせ、それだけしゃべっていいのね」と喜んでくださって、ZOOMでありながら目の前にいるかのような(参加者の感想)乗りに乗ったお話で、参加者を引き付けた。ご自身の豊富なエピソードを交えながら、「理解すること」はむずかしくても「理解しようとする」ことなら出来るはず。そこから始まる、広がる、異文化の楽しさ、御互いに変わることの大切さが伝わってきた。(参加者47人)



取組事例②

【第11回 パワーアップ講座 令和5年3月3日】「外国ルーツの子どもの育ちを支える連携」
さいたま市の日本語指導員・スクールソーシャルワーカー・地域で日本語活動をしている人が参加。
「担当している子どもが、学校生活がうまくいかず特別支援という選択肢を提案されたが納得できない」という日本語指導員の話を出発点に、それぞれが関わっている子どもたちの課題について、じっくり話し合うことができた。SSWが参加していて、特別支援の体制なども聞くことができたことの意義は大きかった。一人の子どもの育ちを支えるためには、学校・地域・家庭の連携が必須だが、それが全くできていないことが浮き彫りになった。また、問題を抱えている子どもの課題を考えていくと、各クラスの中で子どもの気持ちに沿った対応ができていない（具体的には、日本語ができないだけなのに、何もできない子のような扱いをされているなど）、コーディネーターがいないため、中には一人の子どもに手の空いている何人もの教員が入れ代わり立ち代わり取り出し授業を行っている例も出た。それらを総合すると、初期の対応に問題があったのではないかとということ、それを解決するためにコーディネーターが必要だということなどが話された。1月27日のシンポジウムでは「初期の対応の不適切さが子どものその後のつまづきになる」可能性を危惧し、初期対応の大切さを確認し合ったが、今回のパワーアップ講座で、まさに、現実に行き詰っていることを実感した。さいたま市の掲げている「だれ一人とり残さない」という理念に沿って初期対応の体制づくりを進めるよう、この話し合いの結果を報告することにした。参加人数が少なかったからこそ、有意義な話し合いができた。誰かの講演を聞くだけでなく、参加者がそれぞれ自分のことばで自分の考えを言い合うことが本当の意味の学びになると感じた。

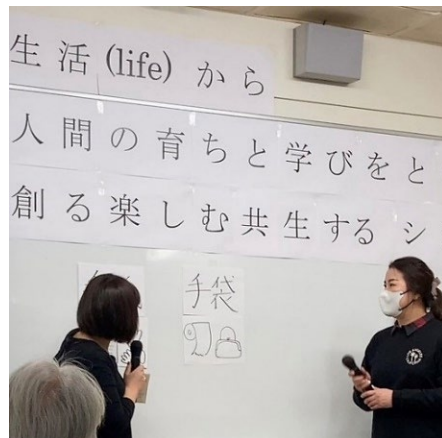


取組事例③

【第8回シンポジウム 令和5年2月19日】埼玉大学福島准教授主催・当団体と協働
『生活(life)』から人間の育ちと学びをとらえ直す 一創る・楽しむ・共生する
東洋大学主催の第1回シンポジウム「外国にルーツを持つ子どもに対する日本語初期指導～実践から見た現状と課題をもとに＜初期対応＞のあり方を考える」を受けて、開催されたシンポジウム。具体的な体制整備に向かうにあたって、もう一度「人の育ちと変容」という根源的な視点に立ち返って教育をとらえなおそうという趣旨で開かれた。
沖縄の珊瑚舎スコーレの代表星野氏と、当団体の3人が登壇して（下の写真左）した。星野氏からは、本当の学びは生活につながるところから生まれること、自分の言葉を持つことの大切さが、生徒との事例を通して語られた。当団体は①わからない体験＝中国語で算数（下の写真右）

②地球っ子クラブ 2000 の取り組み＝活動を通して身につく言葉③外国出身者との活動と対話の中から生まれた私たち自身の気づきと変容について報告した。

さまざまな条件から大学の主催としたが、文化庁の受託事業がなかったら生まれなかったシンポジウムである。開催までには何回もミーティングを重ね、素晴らしいシンポジウムになったと思っている。2回のシンポジウムは大学との連携の効果の大きさを示してくれた。この後押しを受けて、さいたま市の教育長との面談の実現にもつながった。



(2) 目標の達成状況・成果（取組による特定のニーズの充足）

「生活者としての外国人」が人生の重要事項である子育て・教育に主体的に関わるためには、親自身がエンパワメントされ、自己肯定感を持って生活できることが必要である。そしてそのためには、外国出身者に対する日本語学習の保障だけでなく、外国出身者及び日本社会の双方に学びと変容を促すものでなければならない。

そうした視点から「関係の中から生まれる学びと変容」をテーマに事業を進める中で、運営委員である東洋大学の村上氏と埼玉大学の福島氏両氏が協働を申し出てくれた。当初、3者で一つのシンポジウムを開く予定であったが、検討を進めるうちに、両氏がそれぞれの思いも込めて、別々に設定することとなり、当団体は、各回の協力（実質は協働主催）団体として関わることとなった。このシンポジウムの成果は以下の3点である。

- ①実践団体、研究者など、知名度の高い方たちに登壇してもらうことができた。
- ②広範囲の人に参加してもらえた。
- ③私たちにとっても学術的いろいろな裏付けがとれたなど、いろいろな意味で大きな成果に結びついた。

特に、東洋大学の村上氏のシンポジウムでは行政の方たちの参加もあり（平日に設定したためか）、その後、さいたま市の総合調整会議で、シンポジウムの内容を高柳が報告することに繋がった。なお、シンポジウムでは、会場とのやり取りが少なかったこともあり、予定していた勉強会を急遽繰り上げて振り返りの会を開いた。勉強会の中で、参加者が初期指導ではなく初期対応ということばを使っていたこと、変容というキーワードが多く出てきたことなど、私たちが伝えたかったことが浸透していることを感じた。

なお、各取り組みにはできるだけ外国出身者からの発信を入れるようにしてきた。今は自分のことが語れるようになった彼らの言葉は、なによりも力がある。彼らの体験談を聞き、今の活躍を見て感銘を受けたと感想を語る参加者が多かった。

(3) 今後の改善点について

シンポジウムで発表した外国ルーツの元子どもが「今日のシンポジウムのような話を、自分たちの親に聞いてほしい」と感想を述べた。確かに、外国人の親には子育て講座や学習の機会がなく、子どもたちも、自分の思いを重ねられるロールモデルの話を聞く機会がない。取組4では、外国出身者の声を日本社会に届けて、外国出身者とともに課題解決の道を探ることを大切にしてきたが、こうした機会の必要性には気づいていなかった。日本で育った子どもと日本の教育について知らない親とのギャップが、大人になってもなおアイデンティの揺れを克服できない理由につながっていると語る、元子どもの声の重みは大きい。「生活者としての外国人」として、「子育て、教育」が非常に大きな課題であること、私たちが大きなテーマとしている「子どもたちがハッピーになるプログラム」を日本語の獲得という狭い範囲ではなく、日本社会の変容を含めた多角的な広い視野で考えていく必要性を確認した。

外国ルーツの親が子育てと教育について知るだけでなく考える機会を作ること、子どもたちがロールモデルとしての先輩の話を聞く機会を作っていくこと、そして、そのことの必要性を日本社会に発信していくことを軸に、「多文化ハッピープログラム」を構成していこうと思う。

4. 事業に対する評価について

(1) 事業の目的・目標

多言語活動の内容としては、外国出身者の国の文字を使って名前を書いたりカードを作ったりする文字遊び、数字を使ったゲーム、あいさつ言葉遊び、じゃんけんや早口言葉あそび、さらにみんなが知っている絵本を活用してみんなの言葉の響きを楽しむ活動など、すべて、外国出身の人との対話から形になったものである。その多言語活動を、数年前から多言語おはなし会やワークショップとして図書館等で発信し、日本人親子に楽しんでもらっている。その中では、一方的な発信にならないよう、参加している日本人親子と対話が広がるようにプログラムしている。この活動は、外国出身の親にとっては、日本人に向かって発信するという高度なハードルをクリアすることで日本語の力を高めること・自己肯定感を回復すること、子どもにとっては親の活躍を見て母語母文化を肯定的に受け止める契機になること、観客である日本人側も、外国出身者と気軽に活動する機会を得て様々な思い込みに気が付くなど、多くの望ましい効果が確認される。

地域の日本語教育は、日本語の学習を保障すること（取組2・取組3）と、ホスト社会が外国人市民とともに暮らしていることを認識し、双方向の学びを生み出すこと（取組3・取組4）の両輪でなければならないと思っている。今回の取り組みでは、日本語学習者である当事者が多言語活動の主役になり日本社会に発信することを、今までの実績を活かして、より広めていくことをプログラム化した。そして、この活動が、外国出身者の日本語力と活躍する力を高め、また、日本社会に向けては、多様性の豊かさと楽しさを、外国出身者自身が発信し広めていくこと（取組3）につながっている。さらに、日本人側が、言語・文化の違う隣人たちと「共に生きる隣人」として接する力を養うこと（取組3・取組4）で、双方向の学びと変容を促すことを目的とする。加えて、これらの取り組みを通し、外国人が「日本での豊かな子育て・教育ができるようになる日本語教育」「子育て・教育のCando作成」に資することも目指す。

(2) 特定のニーズの充足に向けて試行した方法

●運営委員会（取組 1）は、日本語教育における母語・母文化を活用した多言語活動が、外国人市民自身のためになることはもちろん、日本の子どもたちのグローバル教育にも、一般市民にも、さいたま市の社会全体にも有意義なものであるという意識を共有したうえで、外国出身者が地域社会に向けて発信する場を設けることに協力した。

●教室活動（取組 2）で、「子育て・教育」について学び、多言語活動を地域社会の中で発信できる力をつけた。具体的には、

1) 母語・母文化を大切にしながら、子育て・教育について、仲間と話そう！活動しよう！（全 15 回）
…カリキュラム案にのっとったテーマで、対話、活動を多く取り入れて仲間づくりにも繋げた。子育て、学校教育に主体的に参加し、取り組める力をつけた。

2) 母語・母文化を発信しよう（全 5 回）

…日本語教室の中で発表の機会を作り、自分のこと、自分の考えなどを発信できるようにした。また、お互いの国の多言語活動を楽しめるようにした。

●成果の発信（取組 3）では、学習者が主役となり、日本人と協働して、一般の日本人に向けて多言語・多文化活動活動を紹介した。発信の場づくりには、上記運営委員会の働きがあった。

●人材育成（取組 4）においては、当事者との対話を通し、日本人側に必要な Cando（やさしい日本語等）を学んだ。

(2) 特定のニーズの充足に向けて試行した方法

教室活動の中では、普段から、立場の固定（例えば、教える側と教えられる側）が起きないように、対等の関係を作り出すようにしている。具体的には、外国出身者の母語母文化について日本人側が教えてもらう機会をちりばめて、立場の逆転を演出する。それぞれのルーツを大切にする姿勢は、日本語のハンディのために自信を持てずにいる人を元気にし、自己肯定感を取り戻す力になる。日本語がうまくなくても自分のことなら語れるし、語りたい気持ちが学習のモチベーションにもつながる。また、これは、子どもが親の母語・母文化（自分のルーツでもある）を肯定し、誇りを持つ機会も創り出す（以上、教室活動の中で日常的に実施）。

こうして生まれた対等の関係の中で、協働して、日本社会に働きかける活動（取組 3）を実施した。図書館のおはなし会を始め、小学校のチャレンジスクール、今年度は、さいたま市子育て支援センターとの協働事業として「多文化体験ひろば」も実施した。これらの実現にむけては、私たちの方から、様々な団体に働きかけたし、その理念の共有のために、事前の話し合いも実施した。外国出身者にとっては、自分が主役になって日本人の前で発表することで大きな自信につながったし、日本人にとっても、外国出身の隣人と、楽しく日本語で話したことが新鮮だったようだ。一緒にワークショップをして、楽しい時間を過ごすこのような交流の場を作り出せたことで、日本人が外国人を見る認識が変わったと思う。大きな視点で見れば多文化共生社会に向けた意義があったと思う。外国出身の人にとっては、最大の関心ごとであり、時には心配事である子育て・教育について、相談する仲間もできて、主体的に取り組む力を獲得したと思っている。

(3) 目標の達成状況・成果（取組による特定のニーズの充足）

各取組の参加状況（人数）、講師および参加者の感想や意見、外国出身者の図書館等での活躍を参与観察することにより、取組を通して得られた成果について、以下に述べる。

●教室活動、人材育成の研修には多くの人が継続的に参加した。その結果、互いに関係性を築きながら孤立しがちな外国人親子やその親子に関わる人が集まり、学び合える場となった。

●教室活動では、参加者が自分の文化や言語について発表したり、日本語で自分の考えを述べたりすることで、日本語力の向上、また自己肯定感やアイデンティティの確立などをサポートすることができた。

●多言語活動を地域で発信することで、教室の枠を超えた地域社会で、日本人と外国人が日本語で交流し、豊かさを楽しめる場となった。同じ子育てをする者同士、国籍を超え、日本語で話し合ったり、交流したりする姿が見られた。

●運営委員のメンバーで横浜市の鶴見ひまわりの見学をし、さいたま市で外国出身の保護者も視野に入れた形での「初期対応」をどうしていくか考える場をもつことができた。運営委員会のメンバーである、さいたま市・さいたま市教育委員会との話し合い、東洋大学のシンポジウム、埼玉大学のシンポジウムなどを開催することで、子育て・教育に当たる外国出身者への対応だけではなく、受け入れ体制を整えることにつながるのではないかと思われる。今後とも連携をしながら、体制整備にあたりたい。

運営委員会による事業成果の分析・検証

- 1) 運営委員会は、連携して日本語教育環境の改善に尽力したか
- 2) 教室活動を通し、子育て・教育に主体的に関わる力がついたか、地域社会での活躍ができたか
- 3) 多言語活動等の発信を通し、多文化共生意識が広まったか。

参加人数や参加者の感想、活動の様子などから、すべての項目について、成果があったと検証されたが、今後、このような事業をどう連携し、どう展開していくかが今後の課題となる。

(4) 地域の関係者との連携による効果、成果等

●運営委員会を通し、全体として意見交換を行いながら、委員個別に講演会や研修、会議委員の依頼などを受け、さいたま市・埼玉県日本語教育や多文化共生事業に関わることができた。

さいたま市教育委員会：日本語指導員研修会、教職員希望研究、パワーアップ講座

市や県、国際交流関係機関：協議会や会議の委員、研修会

校長：育成会の講座

大学：シンポジウムの開催

●教室活動の問い合わせなどの連絡から、スクールソーシャルワーカー、学校地域連携コーディネーター等子どもたちの現場にいる専門職の方々と外国出身親子についてのケース会議を行ったり、相談しあう関係性の構築につながったりした。

●人材育成事業を通し、昨年度の人材育成講座に参加した全国の日本語教育関係者や地域の日本語教室関係者との交流・学びあいがあった。孤立しがちな日本語教育関係者もエンパワーされ、各地に勉強会や教室を立ち上げるにつながったという報告ももらった。

●外国人の活躍・発信事業を通し、埼玉県国際交流協会、市内図書館、NPO 法人さいたまユースサポート、さいたま市チャレンジスクール、公民館、生協パルシステム、コープみらい埼玉、さいたま市子育て支援センターあいぱれっと、埼玉県げんきプラザ等と企画・運営の相談など連絡を密に取り、役割分

担をしてイベントの開催を行った。これらの取組は日本人住民との交流の場でもあり、日本人・外国人双方にとっていい学びとなった。その結果、多文化共生の街作りに貢献できたのではないかと考える。

(5) 事業実施に当たっての周知・広報と、事業成果の地域への発信等について

教室活動や人材育成の研修、発信事業における周知・広報は、地球っ子クラブ 2000 だけでなく連携先も口コミや、HP や ML、SNS、チラシなどで広く行きわたるように努めた。

事業成果の地域への発信について、中核メンバーが地域における講演会などの最後にお知らせをすることは効果的であった。地域に根付いた周知・広報が有効であるようだ。

(6) 改善点、今後の課題について

●コロナの状況も改善されつつあり、対面での学びの場を増やすこと。一方でオンラインでないと参加できない参加者もいるので、対面・オンラインを併用しながら継続していくことが望まれる。

●コロナによる入国規制が緩和され、入国してくる人の数も増えてきた。地域の日本語教室に参加を希望する日本語を母語としない人の数も増えてきている。このような状況から、日本語活動にあたるボランティアの確保や育成にも力を入れていかなければならない。

●外国出身者が日本で主体的に子育て・教育にあたるためには、外国出身者の努力だけではなく、体制整備が不可欠である。特に初期対応をどのように行っていくべきか、教育委員会と継続的に話をすすめていきたい。

●人材育成の勉強会などに外国ルーツの＜元＞子どもたちが参加してくれている。現在、教室活動に参加している外国出身親子が先輩たちの話を聞く場を今後、設け、教室活動を発信だけと連動させるのではなく、人材育成の取組とも連動させ、外国出身親子自身が自分や子どもたちの将来を思い描く場を作っていきたい。